

ティックな変貌が読める。

あじさいの小径に、いまだ咲き残るつづじの紅くあきらめており

時期がすぎて、あじさいの季節になつたにもかかわらず咲き残つた紅いつづじ。つつじの紅さは取り残された

あきらめの紅さなのだ、そんな意味だろう。毎年、季節ごとに咲く花が、自分について思つたり考えたりするこ

とがあるのならば、こんなことも思うのかも知れない。

そんな気しさせられる。

高齢者は避難させたと誇らしく言いたる人も高齢に

見ゆ 小畠千佳

にほんでは高齢者の数が急激に増えてきたせいだろう、最近、「高齢者」という語を聞くことが多くなった

気がする。そんな「高齢者」をクローズアップする時代

の空気に違和感をおぼえている作者なのだろう。皮肉から批評へ。「誇らしく」が強くひびく。

円墳のめぐりは青田その畦を子らの一団並びてよぎる

夏の古墳である。子供たちはそろつて見学に来たのだろうか。直接、言われてはいないが、たぶん空は晴れているのだろう。広がる夏の田圃の、色彩だけではなく图形もきわめて鮮明で、読者は色もかたちも、すつきりと心に描き出すことができる。

草の根のながきふかきを取り得ざり大地から湧く命の重し 夏の雑草取りである。一連の最初に「草取りに汗たつ

ぶりのボランティア……」とあるから、自分の家の庭の

草取りではないらしい。なかなか取りきれない雑草をう

たって、強靭な生命力の表現になつていているところが見どころだろう。

冷感のしみ入るまひる石鎚山中宮成就社鳥居をくぐる

「冷感のしみ入るまひる……」が、七月末でも寒い石

鎚山中の空氣をつたえている。「石鎚山中宮成就社」は

石鎚四社の一つで、役小角が石鎚山を開山し、成就社の

「見返遙拝殿」のある場所で「吾が願い成就せり」と言つたというのに、名称の由来とされているという。長い固有名詞を一首の中にもうまく生かした工夫が見どころ。

夏空も抱えきれないほど雲「陽性」通知に打ちのめされて

星野さいくる 今月号「心の花」には、私が昨日から今日にかけて見

ただけでも、新型コロナで陽性になつたという歌が十首以上あつた。佐佐木頬綱宅では一家四人そろつて陽性になつたというメールが、数日前に来た。この作、それらの代表として掲載させてもらった。結句がやや大げさかもしれないが、上句の比喩に注目。

願いごとあればと渡されたるペンを握り十一歳の鎮

もり 駒田晶子 十一歳の子に願いごとを書かせようとしている。そこはどこだろう。学校か。あんがい神社なのかもしれない。欲しいものならすぐ書けるのだろうが、「願い事」と言われても、とつさには難しいのかもしれない。